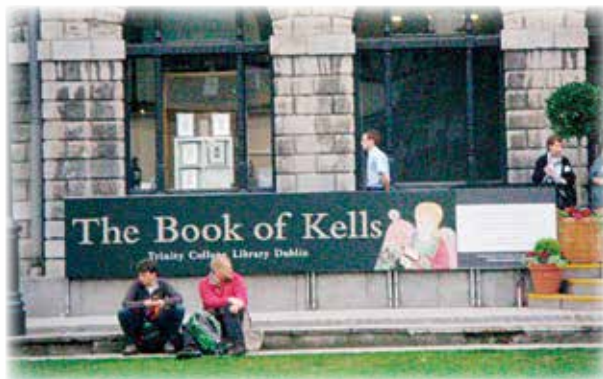


# 図書館報

第132号  
 平成29年2月17日  
 大分工業高等専門学校  
 図書館  
 大分市牧1666番地  
 TEL 097(552)6084  
 FAX 097(552)6786



オールド・ライブラリー



アイルランドの至宝『ケルズの書』の表示



パークリー図書館



博物館とパークリー図書館

## 〈もくじ〉

題字「図書館報」	（校長 古川 明德 書）	1
扉写真:アイルランド共和国 トリニティー・カレッジ・ダブリン	一般科文系 田中 美穂	1
心を癒すメッセージと豊かにする知恵	校長 古川 明德	2
シリーズ・私と読書 (57)「偏食的な読書生活」	一般科文系 山田 繁伸	3
思い出の一冊	一般科文系 久保山力也 ・ 一般科文系 福士 智哉	4
	一般科理系 池田 昌弘 ・ 機械工学科 稲垣 歩	5
	情報工学科 石川 秀大 ・ 情報工学科 小山 幸伸	6
図書館活動の報告	図書館長 山田 繁伸	7
全国図書館大会に参加して	図書係長 若林 薫	7
平成28年度 学生図書委員名簿		8
平成28年度 読書感想文コンクール入選者及び貸出上位者・貸出上位クラス		8
編集後記	図書館長補佐 藤原 宏司	8

## 心を癒すメッセージと豊かにする知恵

校長 古川 明德



まず、私の好きなメッセージとの出会いを紹介します。それは、私の大分高専に来る前の職場での一コマです。まだ九州大工学部が箱崎にあるころ西鉄宮地岳線に乗って通っていました。ある日の電車の中吊り広告にはつぎの詩が書いてありました。

思っていた程物事がうまくいかないで  
苦しんでいるあなた  
人と思いが通じず さびしい心の君も  
一生懸命やっているのに  
他人が解ってくれないと愚痴っている人も  
そんな自分と離れて生きることは出来ないのだから  
自分を励ましてあげよう 自分を誉めてあげよう  
自分には自分しか歩けない道があるから  
他人と比べる必要はないじゃないか  
元気を出して目の前の自分の現在の役割に  
全力で取り組もう。

私が丁度、研究に行き詰っていたころでしたのでこの詩に深く感銘を受け、早速ポスターを1枚入手し、以来、部屋に掲げ、何かあるごとに眺めていました。私がいかに落ち込んでいたかを察して頂けると思います。この詩は福岡県篠栗町の南蔵院ご住職 林覚乗氏によるもので、ご住職は「心豊かに生きる」の著をはじめ感動する講話をされる方として有名です。人が試練にあったとき、強い気持ちにさせる何かを持つと乗り切れるものです。そして打たれ強い人間になって下さい。

ちょっと英語で先人達のメッセージを書いてみました。  
If I have a thousand ideas and only one turns out  
to be good, I'm satisfied

(Alfred Nobel)

Even when one door closes, another opens. But  
we often look so regretfully upon the closed door  
that we don't see the one which has opened for us

(Alexander Graham Bell)

There are no foolish questions and no man  
becomes a fool until he has stopped asking  
questions

(Charles P. Steinmetz)

I'm not discouraged, because every wrong attempt  
discarded is another step forward

(Thomas Edison)

Success represents the 1% of your work which  
results from the 99% that is called failure

(Soichiro Honda)

これらは、メモとして走り書きしたものから興しましたので、wrong words and expressionsがあるかもしれませんが、意味を取ってみてください。

そして話は代わって、「豊かな生活を得るには」について考えることを書きます。昨年、トマ・ピケティ著の『21世紀の資本』という書がベストセラーになりました。彼は経済データをもとに資本収益率と成長率を比較して資本主義経済が格差を拡大することを示しました。しかし「豊かな生活」とは、皆さんもご承知の通り、経済が全てではありません。以前(本報128号)にも書きましたように、金持ちの振りはできますが教養のある振りは数分でばれてしまいます。教養人は金持ちとは違い、一瞬で成れるものではありません。人に魅力を与え心豊かな生活を求めるには、「教養人」となることです。では教養人とは、その人が得た豊富な知識と知恵に基づいて人間としての行動ができる人ではないでしょうか。

では「知識」、「知恵」とは何でしょうか。言葉の意味を議論するつもりはありませんが、私的に考えますと、「知識」は「知識を得る」というように外から学び取り、覚えて頭脳に蓄えていくものを指し、「知恵」は「知恵を磨く」というように知識や経験を通して体得したことからアイデアを創出することを指すのかと思います。したがって講義等の座学では基礎としての「知識」を学び、実験実習等では応用技術としての「知恵(の具現化方法)」を学んでいることになります。ただこれらは、授業として、専門学科でエンジニアとして修得しておくことを体系的に、しかも効率的に行うもので、限られたものであります。したがって社会生活に求められる「生きる知恵」については、学内外での活動を通して身に付けていくことが肝要で、人間としての大きさは、その量によって違ってきます。読書や映画等の鑑賞も一つの疑似体験であり、多くの知識や知恵を学ぶことができます。

何事においても、いかに多くの「知恵」を出せるかが成功の鍵と言えます。ある人の言葉を借りると「知恵が湧かぬなら知識を追い求めよ。まずは基になる知識を身に付けよ。基たる知識が身に付いたならよく考えよ。よく考えて知恵を出すべし。広く深い知恵が湧くようになれば、今度は知恵が新たな知識を呼んでくる。」であります。また「三人寄れば文殊の知恵」という諺もあります。難問に直面した時、皆で真剣に考え多くの知恵を出し合えば、解決の糸口に近付くことができます。さあ、知恵者となって豊かな生活を会得しよう!!

図書館には、工学の専門書や参考書だけではなく、一般常識・教養を与える書、そして人生の道標・教訓となる書など多数揃えてあります。どうぞ図書館を大いにご活用して、「自分を励ましてくれるメッセージ」に出会いましょう。そして、それとともに「知恵」の基となる「知識」を多く学んで下さい。

## シリーズ・私と読書 (57)

## 偏食的な読書生活

一般科文系 山田 繁伸



国語科教員なので、「私はこんな本をこんなにたくさん読んできました。皆さんもどうですか」と景気よく書き、皆さん方の読書に役立ちたい。しかし残念ながら、読書家でも蔵書家でもない私はそうはゆかない。恥ずかしい偏った読書生活を書くだけだ。

就職してからは貧しいながら、読みたい本は購入してきた。そして、購入した本を身の周りに並べて喜んだ。しかし、最近は、本も買わずに過ごしている。読みたい本がないのではなく、ありがたいことに「読むほどは人が送ってくる書物かな」と言うことで、贈呈してくれる。送られてくる本は、見知らぬ方からのもある。いらぬ心配だが、自費出版の歌集や句集のため、出版も大変だったろうと思う。ともかく、私のような者にまで送ってくれるのだから、これも尊いご縁と思い、じっくり丁寧に読んでいく。じっくり読むとは、本居宣長の言葉を借りれば「みづから物の注釈をもせんと」（『うひ山ふみ・鈴屋答問録』岩波文庫、42ページ）と思って読むことである。じっくりゆっくり読んでゆくと、面識もない方の人生が透けて見えてきて楽しい。

最近の私の読書のもう一つは、読書と言えるか分からないが、経典を読むことだ。こちらは、まずは音読。音読だけで終わる日もある。じっくりと読み味わい1日に数行しか読み進めない時もある。深い意味がなかなか読み取れないことも多い。自分の腹の奥底でずっしりと領解できた時は、晴天を仰いだような気分になる。めったにそんなことは起こらないが。

歌集、経典どちらも、ゆっくりと読む。遅い読み方だ。いつだったか、『遅読のすすめ』（山村修、新潮社）と言う本に偶然出会い、遅くてもいいのだと納得した。昔は、多読、速読の脅迫観念にとりつかれ、読書量の少なさを恥じていた。本との出会いは、人との出会いと一緒に、多ければ多いほどいいと言うものでもない。しかし、私の読書は、偏食もいいところで、人には勧められない。これでは、栄養が偏り餓死してしまうだろう。今でもかなり私は痩せているが、これより痩せると問題だ。やはり、若い人には、偏ることなく幅広いジャンルの読書をお勧めする。

国東の田舎で過ごした小、中、高校時代、家には本はなかった。高校生の頃は、学校の帰り道、本屋で雑誌を立ち読みした。田舎の本屋の棚には、『文芸春秋』と『世界』などごくわずかな雑誌しか並んでいなかった。グラビアの「同級生交歓」を見て、青雲の志を抱いた。今は、一緒に写っていない同級生たちはどうなっ

ているのだろうと、余計なことを思ってしまう。高校卒業までは、農作業の手伝いを逃れるため、勉強した。よい成績を取らないと、このまま農業を継がなければならないと思い込んでいたので、教科書を読んだ。せいぜい赤尾好夫の『若人におくることば』や加藤諦三の『俺には俺の生き方がある』などを読んで、受験勉強をどうにか乗り切った。小説などは全く見向きもなかった。それが、小説を読んで、誰かの解説の受け売りを商売にしている。因果な話だ。

大学の寮に入ると、同室の先輩がなかなかの教養人で、田舎者の私はびっくりした。英文3年の高崎さんと芸術修士1年の志村さんだ。高崎さんは、なぜか日本文学にも通じており、いろいろと助言してくれた。志村さんは、都内に実家はあったが、寮に入っていた。二人の先輩が夜遅くまで、文学や芸術・政治について議論するのを横で何も分からない私は聞いていた。

よき先輩に導かれて、大学時代に少し本を読んだ。大学1年の冬、父が亡くなった。それで、いつまでも東京にいる訳にもいかないと思い、田舎教師になる覚悟を決めた。高校時代の仲の良かった同級生が早稲田の英文に進んでいたの、私は彼とは違う国文を選んだ。3年の終わりか、4年の始め頃、彼が卒論のテーマに迷っていた。その時たまたま読んでいたサマセット・モームのことを私は彼に話した。彼は、モームを卒論のテーマにし、留年もせず卒業した。卒論もうまくいったのだろう。彼はプロデューサーとしてNHKに入局し、池上彰さんがお父さん役を演じた「週刊こどもニュース」も担当した。

一方、私は教員となり、給料をもらうようになってやっと自由に本が買えるようになった。読まない本まで買ってしまった。随分無駄なことをした。初版本を集める知人の影響で自分も初版本にこだわった時期もある。お金はたまらないが、身の周りにたまってゆく本に大満足だった。高専に移ってからは、短歌関係の会津八一や土屋文明など、小説では水上勉などの私小説に親しんだ。水上勉の研究で学位を取ろうと大それたことも考えたが、途中で挫折してしまった。その未練を断ち切るために、全集だけ残し、それ以外の収集した初版本を、水上勉の個人文学館である「一滴文庫」に寄贈してしまった。

何とも偏食変則的な読書生活を続けてきたことか。国語科教員として情けない話である。景気よい読書遍歴を紹介したかったが、実践してこなかったことは書けない。これからも、家人に置き場所に困ると小言を言われながら、時には本を買おう。そして、先は長くはないが、慌てることもなくゆっくり読むことを楽しもうと思う。更には、人様からいただいた歌集を読んで、私も詠んでゆきたい。

## 思い出の1冊



『古代への情熱』  
シュリーマン 著、村田数之亮 訳  
一般科文系 久保山力也

思い出ということになれば、高校生時代に唯一ちゃんと読んだ(と記憶している)一冊を挙げたい。それは、シュリーマン『古代への情熱』(岩波文庫)である。おそらく課題かなんかのために読んだのであろうが、当時思ったこの本の素晴らしいところは、とにかくその薄さ。これ以上薄ければ、本として出版できないんじゃないかと思うくらい薄い。「文章を読む＝国語の授業＝強制」というつまらない発想しかなかった高校生の私にとって、これはありがたい。内容についてもなんというか、日記のような、悩み事や裏話的な感じで、まあこんな本を書いている人だって、ぼくらの同じような普通の悩みをもっているんだなあ、と思わせてくれる。この人、発掘とかをしているマニアなのだが、とにかく頑張り屋さん。何でもめっちゃくちゃ多くの言葉を話すことができるらしい。まあ、発掘って外国に行ったりするんだらうから必要そうでもあるが、通訳雇えばいいんじゃない?とか思いがち。ただその辺がクレージーポイントで、多分シュリーマンは自分が発掘地の言語をマスターしないと納得ができないタイプだったんだと思う。ちなみにシュリーマン曰く、言語ってある程度数(←忘れた)を習得すればあとは簡単に増えていくらしい。あと、こうした自分の頑張りを一生懸命語って、俺ってすごい?的な感じを醸し出すあたりもかわいい。金も超かかるだらうし、現地ではばい事件にたくさん巻き込まれただらうし、奥さんも相当呆れただらうし、親戚からも変なおじさん扱いされただらうし、もうシュリーマンって!と思った記憶がある。

ただ、なぜこれが思い出の一冊かというのと、今、シュリーマンの想いを「わかるー!」と思う自分がいるからだ。分野は違うが、法(学)マニアになった私には、シュリーマンのこだわりがよくわかる。外国語だって、やっぱり調査地の言語は習得したいし、たくさん話せるようになりたい。これにはシビアな問題もあって、調査に行く現地語を理解しないと騙されたり、恐ろしい計画に巻き込まれたりする可能性だってある。「こいつの携帯奪おうぜ!」と、雇ったドライバーとボディガードで話しているかもしれないのだ。ケニアやウズベキスタン、韓国で調査研究をする身になった私は、いみじくもシュリーマンの経験を追従している。英語、韓国語、スワヒリ語に加え、毎日ロシア語、中国語、ウズベク語の勉強をしている。誰でも頑張ったら褒められたいし、認められたい。私は今、研究をもっと頑張って、シュリーマンに、「君は、すごいねー!」といわれたいのだ。



『田宮模型の仕事』  
田宮 俊作 著  
一般科文系 福士 智哉

思い出の一冊というよりも、今回は何気なく読んでみて面白かったものを紹介したいと思います。タイトルにある

『田宮模型の仕事』(文春文庫)は、プラモデルに接したことがある人であれば誰もが知る田宮模型の社長が書いた製品開発の回顧録に近い内容になっています。幼少期から車やバイクが好きで、それが高じて高専(機械工学科)に入学した経緯がありますが、この本を読んだのは高専を卒業した後でした。書店でこの本を見かけた時に、高専在学時に先輩が田宮模型に就職を試み、実際に企業見学をしたところ、あまりのレベルの高さに諦めたという話をふと思い出し、また、文庫でもあるので何も考えずに軽い気持ちで読もうと思った次第です。

本の内容は、たかがプラモ屋の話と思って読むと良い意味で期待を裏切ります(実際に製品が完成する過程を高専で学んでいたことが功を奏したのか、設計から金型製作に至るまでの開発への執念には脱帽しました)。ポイントはいかにして実物を忠実に再現するか。適正価格で商品を販売するためには、開発コスト削減は必須ですが、開発者はそれを拒否して徹底的に細部にこだわります。その一例が1/12スケールのHONDA F1の開発で、当時のF1を細部に至るまで取材し、実車と同じようにステアリングにはピニオン&ラック機構を採用したり、タイヤにトレッドパターンを入れたり、また、「走らなければ意味が無い」ということでモーターライズ化を試みる等、およそコストダウンとは無縁のことをしています(もちろん、泣く泣く諦めた部分もあったようですが・・・)。また、同スケールのポルシェの開発では、実際に車を購入して、それを分解して徹底的にパーツを観察する等、プラモ屋というよりは、技術屋の職人魂を遺憾なく発揮しています。ここに挙げたのはほんの一例ですが、ご存知の通り、田宮模型はミリタリー、ウォーターライン、ミニ四駆等、様々な製品を世に送り出しているの、それらに関する開発エピソードも楽しめます。

何も考えずに読もうと思い手に取った文庫でしたが、やはり、あれこれ考えを巡らせながら読んで始めて面白さが分かります(どの本を読んでもそうですが・・・)。ちなみに、この文庫と一緒に作品集『田宮模型全仕事 1946-2015』(3冊シリーズ)も手に取ると、製品のグレードアップ化が時代と共に進む過程を視覚的に楽しめます。

## 思い出の1冊

『伝わる・揺さぶる！  
文章を書く』

山田 ズーニー 著

一般科理系 池田 昌弘

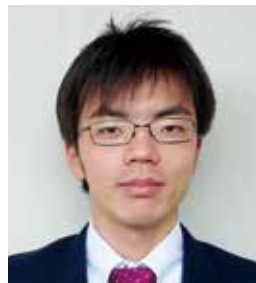
私の思い出の一冊、というよりも、この本は読んでいて良かったなと思える本の中の1冊を紹介したいと思います。それが山田ズーニー氏の著作、『伝わる

・揺さぶる！文章を書く』(PHP新書)です。

この本に出会ったのは大学生の頃で、卒業論文や就職活動時の書類など、徐々に自分の意見を長い文章で書く機会が増え始めた時期でした。文章を書くのが苦手だった私は、本屋でタイトルを見て手頃な値段だったこともあり、すぐに購入しました。ページを開くと、冒頭文から惹きつけられました。「書くことは考えることだ。だから、書くために必要なことを、自分の頭で考える方法がわかれば、文章力は格段に進歩する」。読み進めるにつれて、単に文章作成術のハウツー本の枠に収まらない何か深いものをこの本に感じていきました。自分の考えをいかに説得力をもって他者に伝えるか。著者は教育誌編集者である立場から、具体例を通して読者に熱く語りかけてきます。

子どもの頃を思い返してみると、読書感想文や手紙など、文章を書く機会は無かったわけではありません。しかし、文章の出来次第が、時に人生を大きく左右する場面もある、ということ二十歳過ぎた頃から時折感じることがありました。学生の皆さんも、この点に関してはこれから実感することもあるでしょう。本にも書かれています、文章を書くからには、必ず読み手がいて、自分はどのようなことを目指すのか。筆を進める前に先ずはこのことを意識することが大事です。人生に関わるかもしれない状況ならば尚更です。そのような場面での文章を創る目的は、読み手の心に響いて自分が望んでいる結果に繋げること、なのです(ちなみに、私がこの文章を書いている理由は執筆依頼があったから、なのですが、目的は、読者である皆さんが、ここで紹介した本に興味を持ち、「ちょっと読んでみたいなあ」と思わせること。そして、私と同じように「為になった」と少しでも感じてもらうこと、と設定しています)。大事なことは、文学調的な「豊かな表現力」は、心揺さぶる文章を書く際には、先ずはさほど重要ではないということを著者は力説しています。自分が望む結果につながるよう「機能する文章」こそ最も大事であって、先ずは自分の言葉で平易に書けばよいと思います。この本を読み終わった後、長い文章を書くこととの障壁がかなり低くなりました。

数時間もあれば一気に読破できますし、真面目に読むと、文章を書くことを超えたコミュニケーションの本質に繋がるさまざまな含蓄に気づかされます。まさにこの本の著者の狙い通り、読者の心を揺さぶる一冊だと思います。アマゾンのPHP新書売れ筋ランキングにも上位に位置していますので、お勧めです。まだ読んでない人で、もし機会があれば是非、読んでみて下さい。

『神様とおしゃべり』  
さとう みつろう 著

機械工学科 稲垣 歩

「その内容で伝わるの？」と電話やメールを送るたびに隣席の先輩社員から指導を受けていた前職での新入社員時

代。それから数年後、高専教員に転職した際には「この授業をお願いします」と言われたのみで自身に任された自由度の高さに驚いたものです。授業についてはシラバスなどによりある程度の方針は決まっているものの、部活動や日常での学生指導においては「自分の指導は正しいのだろうか？」と疑問に思うこともありました。その時期にどんな巡り合わせなのか「本を読むことの大切さ」について目にする機会が多く、本から学ぼうと思いその1年間で100冊の本を読むという目標を立て実行しました。その中で読んだ1冊がこの本です。

この1年間では、安部公房や遠藤周作、川端康成といった往年の小説家から、現代の有名どころである村上春樹や東野圭吾、直木賞や本屋大賞にノミネートされるような流行のものなどを読みました。ほかにも自己啓発本とよばれる種類の本も手に取り、有名なものではアドラーの『嫌われる勇気』やマーフィーの『眠りながら成功する』、水野敦也の『夢をかなえるゾウ』などを読みました。この種類の本を何冊か読むうちに、表現は違うけれど大筋は同じことを言いたいのではないか？と思い、その中で一番わかりやすく表現がされていたものがこの『神さまとおしゃべり』(ワニブックス)でした。内容については、10人いれば10個の考え方があって当然で「ほんとにそうなのか？」と疑問に思うこともあります。しかし、疑問に思うということはその裏には異なる自分の考えがあるからであり、この時期に数多くの本に触れたことで物事の考え方を学んだ気がします。この本も、新しい気づきや考えるきっかけを与えてくれた1冊です。

ある本の中に、16世紀の哲学者フランシス・ベーコンによる、印刷機の登場により“知識の大掛かりな再構築の時代が到来した”との言葉がありました。今の時代もインターネットが生まれ、新しい知識の形を模索しながら大きく変化する時代ではないかと感じています。現代は動画など視覚的な情報が多い時代ですが、それでも本を読んで想像することが大切であると感じます。最近では、読書がコミュニケーション能力を高めるとの研究結果も示されているほか、私自身の体験でも本を読んでいる卒研学生は文章が得意という印象を持っています。1日10ページ読めば1月300ページ。1冊の本が読み終わる量になります。気になる本をまずは1冊手に取ってみましょう。

## 思い出の1冊



『せんたくかあちゃん』  
さとう わきこ 作・絵

情報工学科 石川 秀大

私は子供の頃、夜寝る前に母にたくさんの絵本を読んでもらいました。子供にとって、絵本を読んでもらうこと

は、言語を目で見て、音として処理するための初めのステップであり、その後自分で読むようになると、活字の意味を知る、登場人物の心情を知る、著者の心情を知るなどの教養を身に付けていきます。したがって、幼少期にどれだけ絵本を読んでもらったかということは子供の将来に大きく影響を与えます。大人にとっても、絵本は子供とのコミュニケーションツールとして利用することができ、絵本ならではのやぶつとんだ柔軟なストーリーを目にすることで、凝り固まった頭が柔らかくなり、日々の生活が少し豊かになるのではないかと思います。

『せんたくかあちゃん』(福音館書店)は、私が子供の頃に自ら母のところに持って行って、「読んで」と言って何度も読んでもらった絵本の一つです。この絵本の何が気に入っていたのかよくわかりませんが、絵のタッチやストーリーのスピード感、かあちゃんの豪快さが当時の私には新鮮だったのかもしれませんが。この絵本は、題名の通り、超絶洗濯好きのかあちゃんが主人公で、かあちゃんは洗濯機など使わず、たらいと洗濯板でなんでも洗ってしまいます。本当に何でも洗ってしまう人で、遊びから帰ってきた子供たちやそこらへんにいる動物や下駄、傘、ソーセージなんかも洗ってしまい、蜘蛛の巣のように森に張り巡らされた縄に洗濯ばさみで留めて干してしまいます。普通に虐待です。そこに、たまたまかみなり様を通りかかり、森いっぱい干されているいろんなものを発見します。そして、それらのへそをとってやろうと雷と一緒に地上に降りると、まんまと縄に絡まり、生意気という理由でかあちゃんに連行されてしまいます。もうほとんどヤク…(ry. 母ちゃんに連行されてきれいになってしまったかみなり様は、顔もきれいに洗われてなくなってしまったので、子供たちがクレヨンで書いてあげます。気が付いたかみなり様は、子供たちが書いた新しい顔をとても気に入って、喜んで帰っていきました。翌日、その噂を聞きつけた大勢のかみなり様が、きれいにしてもらうために一斉に押し寄せ、かあちゃんがちょっと本気になったところでお話は終わります。話を文字にするとだいぶクレイジーです。

これから、私を含む多くの方は、絵本を読み聞かせる側になると思います。絵本は、幼少教育に不可欠な内容をとても多く含んでおり、プレゼントとしても非常に喜ばれます。本屋に足を運び、子供や孫に読み聞かせたい絵本を探してみたいかたがででしょうか。



『The Fourth Paradigm: Data-Intensive Scientific Discovery』  
Tony Hey, Stewart Tansley,  
Kristin Tolle 共著

情報工学科 小山 幸伸

私が紹介させて頂きたい一冊は、Microsoft Researchによって2009年に発刊された、『The Fourth Paradigm: Data-Intensive Scientific Discovery』です。英語の本なので敷居が高く感じられるかもしれませんが、ペーパーバック版のみならず、100円のKindle版、無料の電子化版!もあるので、まずは気軽にダウンロードして頂きたいと思います。Kindle版は、たくさんの読者がハイライトした箇所も分かるので、「しんどい思いをして英語を読みたくない! 要点だけを知りたい!」という面倒くさがりの学生さんにもおススメの一冊です。計算機科学分野において権威のある、チューリング賞を受賞したジム・グレイが、生前示唆した「第4の科学的パラダイム」について、Microsoft Researchのトニー・ヘイらがまとめ上げ、Rensselaer Polytechnic Universityのピーター・フォックスらが、地球科学等の各研究ドメインに特化した事例を例示しています(ちなみに、両者とも学会でよく見かけますが、特にピーターとは知り合いで、Facebookで連絡も取りあったりします)。科学は、1. 実験、2. 理論、3. 計算機、4. データ中心の科学的パラダイムに分類することができ、現在は、実験や観測で得られたビッグデータを帰納的に解析するデータ中心の科学へと世の中が変遷してきていることを示唆しています。現在も天文学において使われている星のカタログとして有名な「ティコ2」の名前の由来となった、ティコ・ブラーエによる膨大な観測データをデータ・マイニングすることによって、ヨハネス・ケプラーがケプラーの法則を導いたという例が、データ中心の科学の起源のひとつとして挙げられています。ケプラーが活躍した17世紀初頭と現在との最も大きな違いは、ICTデバイスの普及に他なりません。現在、様々なセンサーデバイスなどから絶え間なく出力される3つのV(Volume, Velocity, Variety)で表現される「データの洪水」を処理し、「量が質を凌駕する」ことによって科学を進めるためには、e-infrastructureなどの学術情報基盤の拡充が必要であることを示唆しています。17世紀に立ち返った上で、科学的パラダイムを見つめなおしたThe Fourth Paradigmは、ビッグデータ時代の今後を見通す上で必読の一冊です。なお、これに関連した書籍として、マイケル・ニールセンの『オープンサイエンス革命』(オリジナルの表題は『Reinventing Discovery』であることに注意!)も痛快ですので、おススメのもう一冊として追記させて頂きます。

## 図書館活動の報告

図書館活動は、「図書館運営委員会」と「学生図書委員会」とによって、企画・運営されています。本図書館報の8ページに学生図書委員の名簿が掲載されています。本年度も当初の計画どおりの諸活動を行うことができました。主の活動は以下のとおりです。

- ①新入生図書館オリエンテーション  
平成28年4月6日(水)
- ②ブックハンティング  
平成28年5月13日(金)、11月10日(木)
- ③読書会  
平成28年7月19日(火)、12月19日(月)
- ④読書感想文コンクールの実施・表彰、「もさく」の発行
- ⑤「図書館報」「図書館だより」の発行
- ⑥貸出上位者・貸出上位クラスの表彰  
平成29年1月26日(木)

新入生図書館オリエンテーションで、4月当初、新1年生へ図書館の利用方法が説明されました。ブックハンティングは2回とも生憎の雨でしたが、学生図書委員の協力で、紀伊國屋書店大分店で良書が選ばれました。読書会は、前期はビブリオバトル形式で行いましたが、後期は優勝を決めない方法で実施しました。「もさく」「図書館報」「図書館だより」も、順調に発行できました。原稿をお寄せくださった方々にお礼申し上げます。貸出上位者・貸出上位クラスも8ページ記載のとおり、多くの学生が図書館を利用しています。



7月19日(火) 読書会記念撮影

例年8月上旬に大分県高等学校図書委員研修会が開催されます。毎年それに本校から学生3名が参加してきました。しかし、今年からその時期が前期末試験期間に当たったため、参加できなくなりました。学生図書委員の研修を今後どのようにするか、大きな問題です。

教職員の参加した行事等は、以下のとおりです。

- ⑦大分県高等学校図書館担当者会議(ホルトホール大分)
- ⑧大分県大学図書館協議会総会・研修会(日本文理大学)
- ⑨九州沖縄地区国立高等専門学校図書館長会議(久留米高専)
- ⑩全国図書館大会(青山学院大学 青山キャンパス)

⑦⑩に図書係長が参加し、⑧⑨には図書館長と図書係長が参加しました。会議での主な協議事項をまとめて列挙します。

- ・「新人図書館職員の日録業務の引き継ぎ」及び「図書館職員の研修体制」について
- ・電子ジャーナル・データベースの契約について
- ・図書延滞学生への対応について
- ・閉架書庫内の古い図書の保存方法・取り扱い等について
- ・図書館のセキュリティについて
- ・地震への備えについて

・学外者への図書館の開放及び利用期間の制限についての事項についても、本校も考えてゆかなければならない問題でありました。年々少なくなる予算で、いかにして図書館を充実させてゆか、厳しい問題も議論されました。時代とともに変化しながら、図書館は知の宝庫として残してゆかなければなりません。本校も、学生、教職員、ひいては地域の方々に利用されやすい図書館を目指してゆきたいものです。

(図書館長 山田繁伸)

## 全国図書館大会に参加して

第102回全国図書館大会が平成28年10月16日(日)に東京都の青山学院大学(青山キャンパス)で開催され、出席しました。

午前中の全体会では、開会式、日本図書館協会建築賞表彰、日本図書館協会理事長の森茜氏の基調報告、そして株式会社マナビノタネ社長の森田秀之氏の記念講演がそれぞれ行われました。

午後からは、会場を移して分科会が行われました。分科会は第1～14まであり、私は第9分科会の『資料保存』(「ここからはじまる資料保存—未来に残し、伝えるために—」)に参加しました。

分科会では、冒頭で昨年度の分科会で取り上げられた電子化データの保存について、実は紙媒体の期待寿命の数分の一以下であり、予想以上の脆弱さと長期保存の困難さが明らかにされたとの報告がありました。それを受けて今年度の分科会では、図書館における保存媒体の原点「紙資料」の資料保存についての取り組みについて基調報告、事例報告、ワークショップが行われました。

最初に眞野節雄氏から、本(紙)にとって修理という行為はよくない行為である。そこで図書館における資料保存というのは利用のための保存であるので、利用に耐えうる最小限の修理が望ましい。また、大切なのは資料の予防であり、そのためには、環境対策を含め、資料の正しい取り扱いが必要となる、と資料を保存するうえでの基本的な考え方についての報告がありました。

次に埼玉県立図書館の神原陽子氏と一橋大学の床井啓太郎氏から、それぞれの館・センターで実践された資料保存についての取り組みに関する事例報告がありました。

最後にワークショップ形式で、紙資料の修復に最も適した和紙のサンプルが配布され、和紙を補修に使用する意義(パルプに比して繊維が長く、接着時になじみやすい利点等)について説明を受けました。個人的に和紙の繊細にして、強靱、さらに品質、手触り、温かみなどにあらためて感銘を受けた分科会でした。

(図書係長 若林 薫)



第九分科会「資料保存(ここからはじまる資料保存—未来に残し、伝えるために—)」の様相

平成28年度 学生図書委員名簿

学科 / 学年	任期	機械工学科	電気電子工学科	情報工学科	都市・環境工学科
1	1年	兼田 皓生	坂川 樹生	菊池 袖衣	織田 和希
	前期	立川 正真	中尾 瑞生	石井 俊平	片山 愛理
	後期	立川 正真	大石 龍太	石井 俊平	廣戸 鳳馬
2	1年	篠田 侑実	渡邊 航平	井上 晴天	竹田 はるか
	前期	池田 圭佑	深津 美希	栗山 寛隆	須賀 万由子
	後期	池田 圭佑	丸山 晃世	大野 祐輔	須賀 万由子
3	1年	山本 祐樹	○吉野 佑弥	○河野 実裕	○小島 広行
	前期	三浦 亮	出田 陸	井上 朋哉	鹿野 洸介
	後期	三浦 亮	出田 陸	井上 朋哉	清藤 優希
4	1年	◎高橋 雄文	中尾 優太	佐藤 太朗	米光 佑太
	前期	友成 巧	矢野 拓海	長野 耕平	河野 武蔵
	後期	友成 巧	糸長 優磨	長野 耕平	河野 武蔵
5	1年	安藤 達也	高野 修平	相澤 瑠奈	山田 麻矢
	前期	三宅 広一郎	佐藤 久周	尾崎 光	森田 真由
	後期	三宅 広一郎	佐藤 久周	尾崎 光	森田 真由

\*図書委員は上段が1年任期 ◎学生図書委員長 ○学生図書副委員長

平成28年度 読書感想文コンクール入選者

	クラス	氏名	作品名	著者名
第1位	3M	野上 達平	『山月記』を読んで	中島 敦 著
第2位	1S	岸本 うらら	『世界から猫が消えたなら』を読んで	川村 元気 著
第3位	3C	田淵 愛佳	『君の臍臓をたべたい』を読んで	住野 よる 著
佳作	2M	野田 琉人	『おじいさんのランプ』を読んで	新美 南吉 著
//	2C	竹田 はるか	『いのちをいただく』を読んで	内田 美智子 著 諸江 和美 絵 佐藤 剛史 監修
//	3M	首藤 聖人	『カエルの楽園』を読んで	百田 尚樹 著
//	3E	梅本 恭平	『君の臍臓をたべたい』を読んで	住野 よる 著
//	3C	日名子 唯	『少女』を読んで	湊 かなえ 著
//	3C	村上 彩音	『心を整える。』を読んで	長谷部 誠 著
//	4E	平野 音瑠	『脳を若々しく保つー 「ほら、あれだよ、あれ」がなくなる本 物忘れしない脳の作り方』を読んで	茂木 健一郎 著 羽生 善治

平成28年度 貸出上位者・貸出上位クラス

貸出上位者

順位	クラス	氏名	貸出冊数
第1位	3E	吉野 佑弥	215冊
第2位	1C	片山 愛理	166冊
第3位	4E	山本 雄介	131冊
第4位	5C	吉武 愛佳	113冊
第5位	3M	舩越 啓樹	110冊
第6位	4M	高橋 雄文	108冊
第7位	4E	平野 音瑠	100冊
第8位	4E	中尾 優太	90冊
第9位	5E	佐藤 駿	83冊
//	1C	椋本 美里	83冊

貸出上位クラス

順位	クラス	貸出冊数
第1位	4E	446冊
第2位	5C	400冊
第3位	1C	381冊



編 集 後 記

図書館報第132号(平成28年度)の発行にあたり、ご協力いただいたすべての方々に心より感謝いたします。初めての図書館長補佐として、図書館報・明野通信・紀要などの発行にかかわったり、図書委員会の学生たちと一緒に読書会・ビブリオバトル・ブックハンティングなどの活動に参加させていただきました。特に学生たちの生き生きとした表情を見ることは、私にとって素晴らしい喜びであると同時に大変良い刺激にもなりました。少しでも多くの学生や教職員の方々がこれらの活動に参加していただければ幸いです。今後とも図書館や図書委員会の活動に対して、ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。(図書館長補佐 藤原 宏司)